四季 ―志木自然報告―
Shiki Seasonal Nature Reports 2023

【冬の句】

山茶花の裏の風鈴鳴りにけり

解体へカウントダウン欅散る

寒禽のねぐら曙杉の上

配管に身体を寄せて寒の鯉

透けて見えたる寒鯉の肉の色

（前北）

〔補足〕

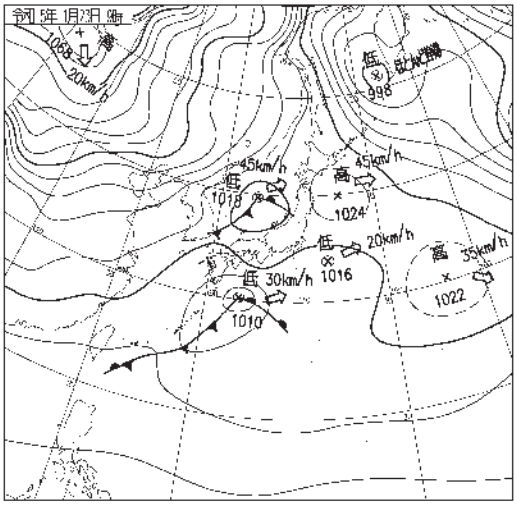
今回、俳句を前北先生にお願いしました。第２句は、多目的棟の建設に先立って解体された旧音楽棟ならびに併せて伐採された欅のことを詠われたものと思われます。この旧音楽棟は、校内で最も古い建物の一つであり（もう一つは硬式庭球場西側の旧柔剣道場）、２０２４年にお披露目が予定されている新棟建設に向けて、解体されました。

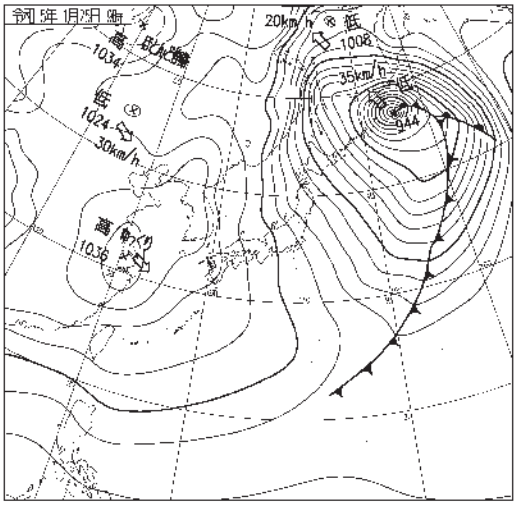
新棟は、「多様な『交際』ですすめる『数理と独立』の教育」を具体化する、適正規模教育を実現するための最適解の一つです。１学年の人数を収容できるホールを含め、さまざまな教室群が内包されるこの建物を，如何に有効活用するかは、皆さん次第です。

「補足」文責　宮橋

大寒波到来～７年ぶりの最強クラス

Meteorology





23日に本州の南岸と日本海に二つの低気圧が発達しながら進み、25日には日本の東の海上で最盛期となった。

次ページへ⇒

z/c 353-0004 埼玉県志木市本町4-14-1[tel: 048-471-1361]
慶應義塾志木高等学校

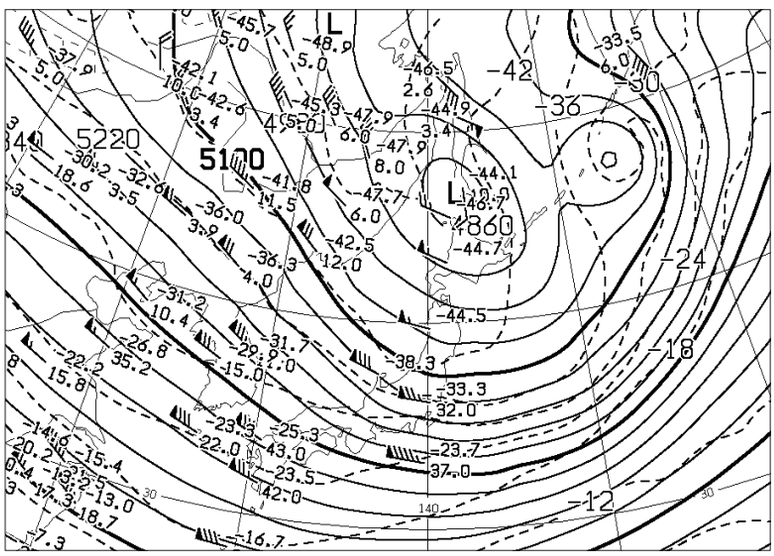
2023年　冬 号（No.082）
2023年　1月27日発行

前ページからの続き⇒

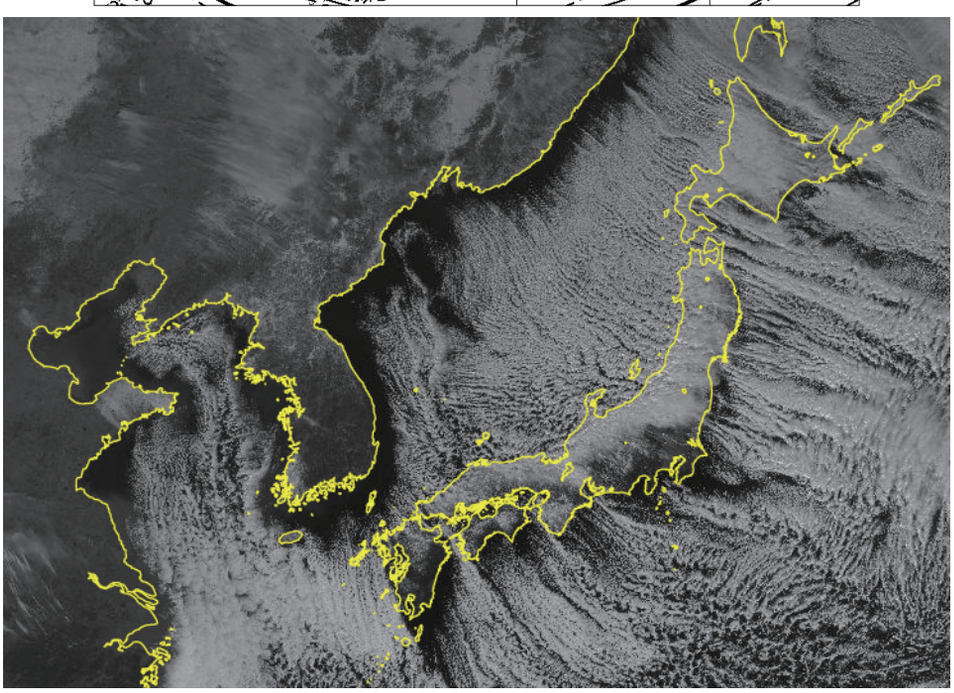
1月23日は推薦入試がありました。この日は本州の南岸を低気圧が東に進み、雪が心配されましたが、実際には南の海上を進んだため降水はなく曇りでした。じつはこの日、日本海にも低気圧があって東に進んでいました。この二つの低気圧が24日～25日にかけ、発達しながら日本の東海上に達しました。25日の日本の東の海上の低気圧の中心気圧は944hPa、日本の西の大陸の高気圧の中心気圧を見ると1036hPaですから、両者の差はおよそ100hPa（これは約0.1気圧！）です。この間には等圧線が南北に23本、「縦じま模様」に走っています。この縦じま模様の等圧線に沿って、日本列島は全国的に北西の強風、ところによって25m/sを超える暴風（暴風雪）が吹き荒れました。

シベリアからの冷たい空気が日本海を渡ると、日本海の暖かい海水が蒸発して雲ができ、それが強風に流されることで「すじ状の雲」ができます。今回の風は日本列島の山脈を越え、太平洋に達したため、太平洋にもすじ状の雲ができています。これは冬型が非常に発達したときだけ見られます。

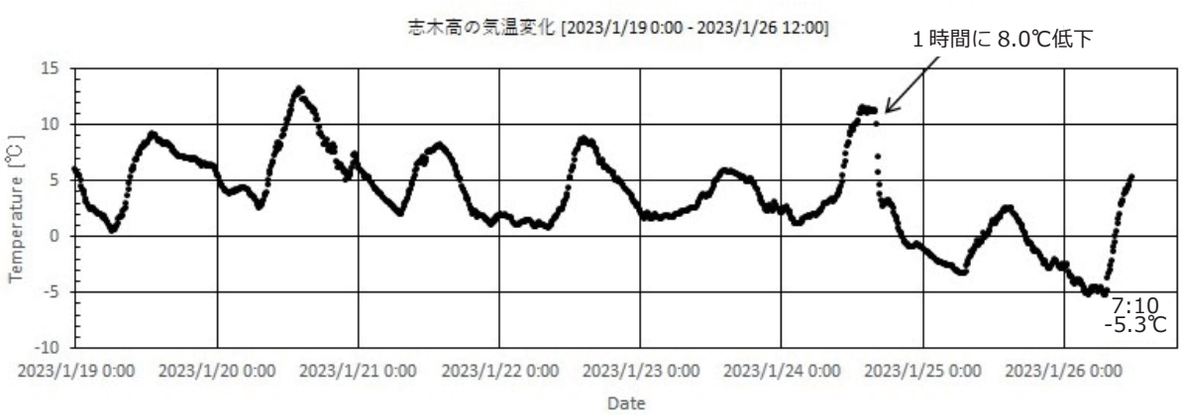
志木高でも気温の観測をしています。志木では24日の16時ごろから北風が唸りだし、17時までの1時間に8.0℃気温が下がりました。25日の最低気温は-3.4℃、26日は-5.3℃まで下がり、生物室の前の池は全面結氷しました。



500hPa高層天気図：気温（破線）に注目。最強クラスの寒気が南下。
雪の目安の－30℃は近畿北部まで、大雪の目安の－36℃は関東～北陸まで、普段は北海道止まりの－42℃の等温線が東北～新潟まで南下している。



2023年1月25日12時の気象衛星画像（可視画像）
縦じま模様の等圧線（前ページの右側の天気図）に沿って東シナ海や日本海にすじ状の雲が発達。風は山脈を越えて太平洋へ。



(Higuchi)

年の変わり目に亡き人を思う

Museum

年末、学生の頃から長くお世話になった恩師の一人が亡くなった。美術史研究者で武蔵野美術大学教授の朴亨國（パクヒョングク）先生。57歳。急逝だった。他大学の大学院生であった私が朴先生の授業を聴講させてもらったのはもう20年近く前のこと。その後、その同じ教室で、非常勤講師として初めて大学で講義をする機会も与えてもらった。武蔵美では、彫刻学科の学生たちが参加する古美術研究旅行の解説役も任された。この旅行はたびたび志木高の授業でも話題にしたので、聞いた生徒もいるはずだ。

訃報のショックを引きずりつつ、年明けに、府中市美術館で開催中（2月26日まで）の展覧会「諏訪敦―眼窩裏の火事」を訪れた。1967年生まれの画家、諏訪敦（すわあつし）の個展である。2018年から武蔵美の教授も務める諏訪は、写実をきわめた作風で知られるが、亡き人の肖像画など、しばしば「もはや見ることのできないもの」も絵画化してきた。その独特な制作過程はテレビにも何度か取り上げられているので、見た人もいるかも知れない。この展覧会も死者との関係を考えさせる作品が多かった。

全3章で構成される展覧会の1章「棄民」には、1999年に亡くなった父の死顔のスケッチや、敗戦直後に旧満洲の日本人難民収容所で亡くなった祖母を描いた作品が展示されていた。諏訪は父が遺した手記で祖母のことを知り、旧満洲を自ら訪れるなどして、亡き父が見た「母の死」を絵画化することを試みた。亡くなった時の祖母と同じ年格好の若い女性をモデルに仰向けの裸体を描き、それを絵の中で痩せ衰えさせて「殺す」。祖母は栄養失調と伝染病（発疹チフス）で亡くなったので、その病変について医師の助言を得、現地で得た証言も反映させる。その異様な制作過程の成否は作品を見て判断してほしい。なお、テレビのドキュメンタリーでこれを知った大川史織が諏訪を取材している。大川は2020年冬の志木演説会で講演をお願いした慶應法学部卒の映画監督。そのインタビューは、大川監修の『なぜ戦争をえがくのか―戦争を知らない表現者たちの歴史実践』（みずき書林、2021）に収録されているので、展覧会で興味を持った人はぜひ読んでみてほしい。

2章は静物画でこれも見応えあり（下の図版参照）。3章「わたしたちはふたたびであう」は肖像画。描かれているのは、シリア内戦の取材中に命を落としたジャーナリストの山本美香や、ベッドに横たわる100歳の舞踏家大野一雄である。テーマは「絵画を経由して対象との再会を果たす」。諏訪がたどり着いた「描き続ける限り、その人が立ち去ることはない」という感覚も興味深いが、私がつい気になったのは「その先」のこと。すなわち、描き手が亡くなっても鑑賞者がいる限り、作品は生き続ける。美術史学は、美術作品を通して、かつてそれを作った人、作らせた人、見た人のことを考える学問である。研究対象が肖像画なら、その像主も、描いた人もいなくなった後、その人たちのことを絵からよみがえらせようとする。作られた時代がどんなに古くても、目の前にあるモノを手がかりに死者たちと出会おうとする。美術はそうした意味でも、死者を思うためのよすがとなるのである。

諏訪敦《目の中の火事》2020年　東屋蔵
（府中市美術館ウェブサイトより）

そして、画家が画を残すように、研究者は研究を残す。残された論文を読むとき、我々はその研究者とふたたび出会うことになる。研究者の訃報に接した時、一ついつも同じことを思う。私も論文を書かねばならない。できるならより良い論文を。

(Hara)

志木の自然[長月(9月)神無月(10月)霜月(11月)師走(12月)睦月(1月)]　*Plants*

本校にはナンテンの木が何本かある。「南天のど飴」で有名だが、確かにその実には鎮咳作用のある成分(Nantenine=$C_{20}H_{21}NO_4$)を含む。話は変わるが、今春から放送予定のNHKの朝ドラ『らんまん』は、植物学者、牧野富太郎がモデルである。彼は「日本の植物学の父」と呼ばれ、2,500種以上の植物を命名した。ナンテンについての記述も残しており、滋賀県で近江伊吹山植物講習会を行った際、同地の旧家、的場徹氏邸に日本一と言っても過言ではないナンテンの巨木があったと伝えるものである。ナンテンは3mほどの高さになるという(巨木?)。材は緻密で、ステッキの柄に使われることもある。

[2022年9月～2023年1月までの開花情報]

Grass

15. Sep ヒガンバナ,カナムグラ,シロザ,カラムシ,サクラタデ, ヤブタバコ,ヒトツバヨモギ,アメリカセンダングサ

4. Oct トキリマメ, チカラシバ, ササガヤ,ニガヨモギ, ヤブマメ,セイタカアワダチソウ

15. Oct ホトトギス, カントウヨメナ,ガガイモ

25. Oct アカジソ

5. Nov オニノゲシ

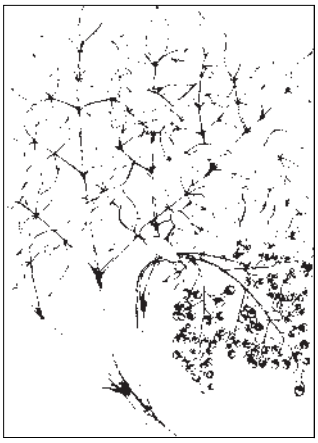
26. Nov ナズナ

24. Dec オオイヌノフグリ, ニホンズイセン

3. Jan ホトケノザ

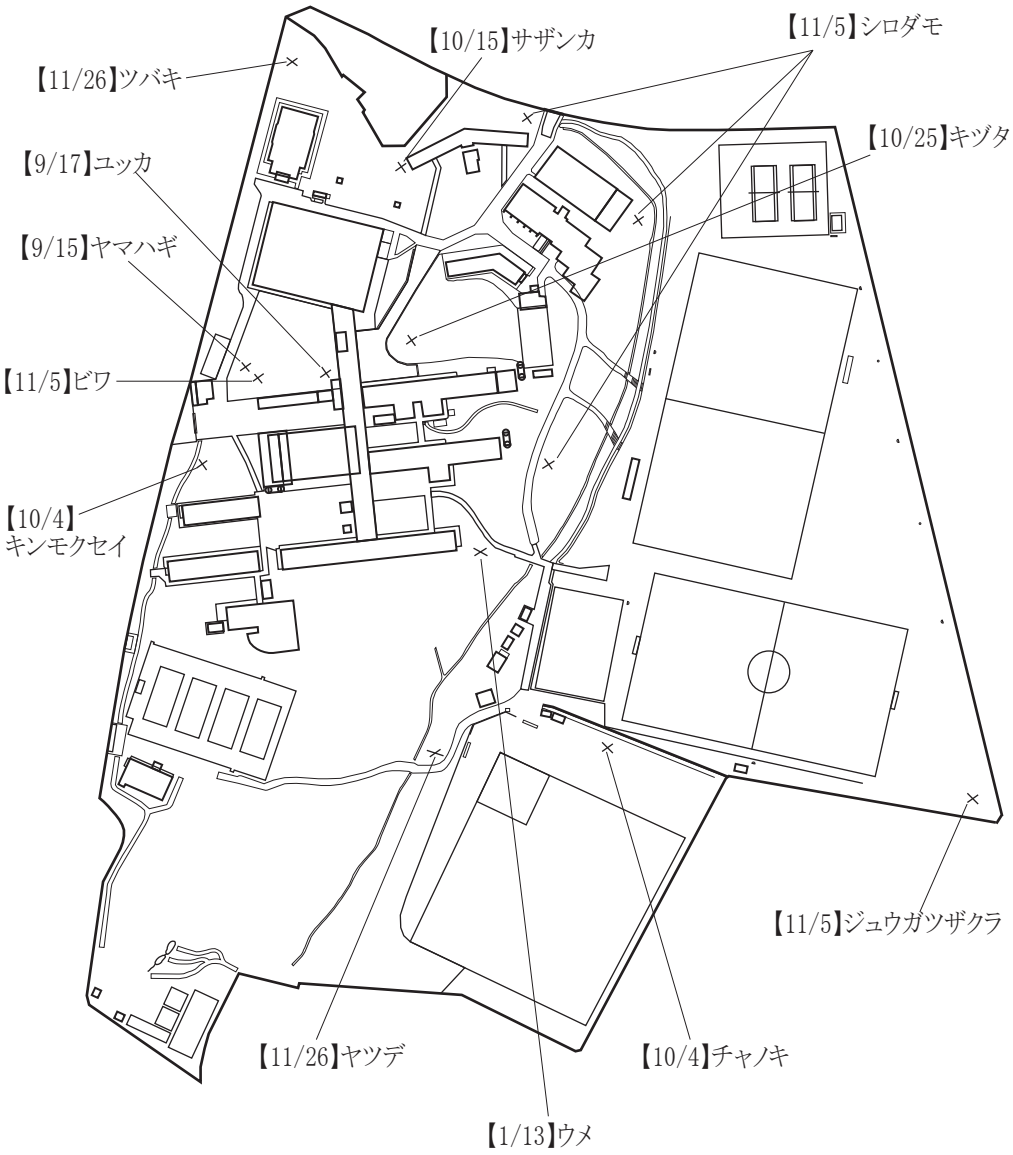
13. Jan ミドリハコベ, オオジシバリ,オニノゲシ

24. Jan ツワブキ



【ナンテン】
メギ科ナンテン属

Wood



(Miyahashi)

この限られた紙面では、名前の出ている植物や動物がどのようなものであるかをお示しする事は不可能です。名前を手がかりにぜひ図書館などで一度調べてみてください。

執筆・担当区分	天文・気象	樋口　聡　*(Higuchi)*
	歴史・美術	原　浩史　*(Hara)*
	俳句	前北　馨　*(Maekita)*
	植物・地質　他[&発行責任]	宮橋　裕司　*(Miyahashi)*
	編集・植物画	荒巻　知子　*(Aramaki)*